

経済思想家としてのヒュームとカンティヨン（II）

別 府 芳 雄

I. ヒュームとカンティヨンの対比

前章でディヴィッド・ヒュームの生涯について述べた。ヒュームが1734年から1737年にかけて、ラ・フレーシュ（La Flèche）というフランスの地方都市における若き日の孤独な滞在期間中に『人性論』を執筆し、1739年の正月終りに出版したことも述べた。それは当時28才の青年思想家ヒュームが始めて世に問うた匿名の処女作ではあったが、『人性論』は——ヒュームの期待を裏切って——当時の世人から見棄てられたばかりか、ついに著者たるヒューム自身によっても、見棄てられた作品となり、ついにヒュームの生前において再版されることもなかった。

『人性論』の失敗を転機として「ヒュームは“日常生活から遠くはなれた問題，『人性論』で彼が徹底的に深く取り扱った清澄な問題——をなげすてた”。厳に学的な哲学によって名声を獲得せんとして失敗したヒュームは『人性論』の徹底性と深さとを鑑識しえなかったイギリスの浅薄な読者層の愛顧をかちえんがために，“通俗哲学の，広汎な読者層をもつ評判のよい著者，はるかに通俗的な問題を取扱う随筆家（エッセイスト）”たらんとして，“その偉大なる変通の才”を発揮した。クルーゼ（Kruse）〔デンマークのヒューム研究家〕の言葉によると，まさに“野心が変通の才を動員した”のである。のちには，ヒュームは全く哲学をすて去り，政治経済学や歴史のごとき，哲学とは全く違った——はるかに实际的で，もっと

一般に理解される学問の先達者となることすらできた¹⁾」のだという。つまり、ヒュームは「読者に対する“完全かつ無条件降伏”²⁾」の結果、読者にわかり易い——公衆の愛顧をもちうるエッセイストに変身したのであった。

しかし、たとえば『人間悟性論』(Inquiry of Human Understandingのちに, An Enquiry concerning Human Understandingと改題)は、ヒューム自身『人性論』の失敗(読者から歓迎されなかったこと)から、読者にわかり易いように書き改めたものといわれているが——山崎正一氏によると——「今日では、内容上『人性論』の方がすぐれているというのが、まず定説である。既述のクルーゼは、この点、極端であって『人性論』をもって、ヒュームの哲学的思索の最初にして最後のものであり、この青年期の著作において、ヒュームは、哲学的問題に彼のなし得る限り最も深く侵入しており、それはただに青年の熱情によってのみならず、立派な一個の人間としての重厚さと透徹性とをもってそうなのであり、ヒュームはこれ以上、前進しなかった。『人間悟性論』は単なる繰りかえしで、それも断片的で『人性論』のごとき統一性もなければ、緊密な連絡もない。それは無智な公衆におのれを屈し、降伏したものである³⁾」(新カナ使いに改む。以下同じ)と解説している。

当時の読者層が求めていたものは『人性論』などよりも、もっと軽いタッチの知的教養にあたいするものであったから——ヒュームは素速く広汎な読者受けのするエッセイ形式をとった。つまりヒュームは『人性論』が世人から顧りみられるようになるまでは——「一連の小論文(eine ganze Reihe kleiner Essays)を書いて、世間の注目(Aufmerksamkeit der Öffentlichkeit)を集める⁴⁾」必要性を感じたものらしい。これがヒュームが素速くエッセイストに変身した理由である。

ヒュームの「エッセイ集は、1741年のはじめに、エディンバラのキンケイド(A. Kincaid)書店から匿名をもって刊行せられた『道徳・政治論

集』(Essays, Moral and Political)が最初である。これはヒュームがみずから『自叙伝』においていうところによると、“好評をもって迎えられ、私の失意をすっかり忘れさせた”ものであった。改訂第2版が同書店からただちに翌42年に公にせられ、第2巻(Ditto. Vol. II)が同じ42年に引きつづき⁵⁾公刊」されるにいたった。引続いてヒュームは主著『人性論』を改作して、「道徳・原理研究」(論集第3巻)(An Enquiry concerning the principles of Morals, London. 1751)、「政治論集」(論集第4巻)(Political Discourses, 1752)「4論文集」(論集第5巻)(Four Dissertations, 1757)を公刊した。このうち『政治論集』(Political Discourses)は、1752年2月、300ページ余りのオクターヴ版一巻として、エディンバラで出版されたものであって——そのなかに彼の経済学的見解を述べた諸論文が公開されている。『政治論集』(Political Discourses)の初版には「経済論文として〈商業について〉〈奢侈について〉(1760年に〈技術における洗練について〉と改題された)〈貨幣について〉〈利子について〉〈貿易差額について〉〈租税について〉〈公信用について〉〈古代諸国民の人口について〉の8篇が含まれていたが、その後1758年には新たに〈貿易上のしつとについて〉と題する短かい論文が加えられて9⁶⁾篇」となっている。田中敏弘氏は「ヒュームの『政治論集』はイギリスだけでなく、外国でも名声を博し、ポーランド王の私的な秘書であった、モヴィヨン(Elezar Mauvillon)による最初のフランス訳が初版の翌年1753年に公刊され、ついで1754年には、有名なル・ブラン(Le Blanc)訳が現われている。ヒュームの伝記家、バートン(John Hill Burton)によれば、このル・ブラン訳は非常によく売れ、かつてモンテスキューの『法の精神』がひき起こしたようなセンセーションを生むだろうというル・ブランの予言は、そのまま的中したということである。ル・ブラン訳は翌年にはベルリンで版を重ねており、さらに別のフランス訳が66年と67年に現われている。以上のことは『政治論集』がフランスの読書界に与えた影響のほどを

よく示していると思われる。バートンは『政治論集』が公刊されたときのフランスには、ケネー、ミラボー、テュルゴなどの重要な著作がまだ公刊されていなかったことに注意し、ヒュームのこの小さな書物が論争の出発点となって、スミスの『国富論』公刊までのあいだに刊行された、経済学に関するフランスの多くの著作を生み出すうえで大いに役立った、とのべている⁷⁾と解説したうえ、「1750年代から『国富論』までのイギリス初期資本主義の発展と成熟とを背景に、経済思想が豊かに生成しつつあった、いわゆる重商主義からスミスへの過渡期における広範な経済学論争の出発点となったのが、『政治論集』なのである……」⁷⁾とヒュームの『政治論集』の歴史的意味を具体的に示している。

バートン (Burton) は——ヒュームこそは経済学上においても、哲学上におけると同様に——“独創的な、勇敢かつ実りゆたかな革新者” (an original, a daring and a fertile inovator) であったと賞讃し、ヒュームの論文 (essays) は「経済学の揺籃 (the Cradle of Political Economy) をなしている」⁹⁾とさえ述べているが、しかし、ジェヴォンズはむしろ否定的で——「私は、このことば〔バートンの言葉〕をば、決して否定するところではないのだが……しかしながら、彼〔バートン〕はおそらく、ヒュームの1752年の論文を以て“経済学原理の最初かつ最簡単の展開” (the earliest, shortest and simplest development of its principles) とは認めえないであろう。〔それどころか〕……カンティヨンがいやしくもヒュームに負っているなどと考えるマカロック (McCulloch) の誤謬には到底おちいらないであろう。マカロック (McCulloch) はこの問題については大いに咎 (とが) められるべきである (McCulloch is much to be blamed in this matter)¹⁰⁾」と述べ——カンティヨンの先駆性とカンティヨンの経済学にかんする系統的叙述を高く評価する。すなわち——カンティヨンの「この〈論考〉 (『商業本質論』を指す) こそは、ただ単なる論文 (essay) とか、またヒュームの論集のような脈絡なき論文の寄せ集め (collection of

経済思想家としてのヒュームとカンティヨン
disconnected essays) などよりも、遙かに上々のものである。本書（『商業本質論』）こそは系統的な、脈絡ある論文（systematic and connected treatise）であり、およそ課税の問題を除く、ほとんど経済学の全分野にわたって簡潔な論述をなしているところのものである。かくて本書（『商業本質論』）こそは——私の知るかぎり——経済学の第1論作（the first treatise on economics）である。……カンティヨンのこの〈論〉（essai）こそは、およそ他のいかなる唯一の労作に較べても、いっそう明確に“経済学の揺籃”（the Cradle of Political Economy）たるものである¹¹⁾と述べて、ヒュームの『政治論集』（ジェヴオンズによると、“脈絡なき論文の寄せ集め”）よりカンティヨンの『商業本質論』の系統的労作を讃え、カンティヨンの経済学上の先駆性を高く評価している。

またジェヴオンズは「わずらわしい対比ではあるけれども、もし紙幅だけに許せば、私はカンティヨンの『商業本質論』とヒュームの有名なポリティカル・エッセイとの入念な比較（careful comparison）を試むべきであった¹²⁾」と述懐しているのみならず、「金銀の価値に関しては、デール（Eugène Daire）は、この種の対比をなして、しかしてカンティヨンに有利な審判をくだし〔ている〕。けだし、彼の考えうるところによれば、ヒュームの見解は或る誤謬におちいっている¹³⁾」のだという。たとえば、「貿易差額（the balance of trade）に関するヒューム同書の第5論と、カンティヨンの第2篇第7章とを比べることは最も有益である。これらの著者は兩人いずれも、一国内の貨幣は急激に増加または減少するものと想像する。しかるにヒュームは、この問題を漠然たる文学的高雅（vague literary elegance）をもって論じているのであるが、これにひきかえカンティヨンは、物価に及ぼす効果をケアンズ（Cairnes）またはクールノー（Cournot）のごとき科学的精確さ（scientific precision）をもって分析している¹⁴⁾」と断定し、カンティヨンに有利な審判をくだしている。シュムペーターは——もっとハッキリと——ヒュームの『道徳・政治論集』

(Essays, Moral and Political.) は、「主として通俗化の作用をなしたにすぎない (sie wirken von allem popularisierend)。個々の点において皮相^{〇〇〇〇}な^{〇〇〇〇}見解^{〇〇〇〇}の跡 (Spuren von Flüchtigkeit) が現われているのみであって、彼の哲学的著作に見られるような偉大^{〇〇〇〇}な独創性^{〇〇〇〇} (die grossartige Originalität) は少しも存しない……時代の月桂冠 (Palme) はカンティヨンに与えられなければなるまい (die palme aber gebührt Cantillon)¹⁵⁾」と書いている。してみると——ヒュームとカンティヨンを対比した場合、栄冠 (die Palme des Sieges) はカンティヨンに与えられねばならぬことになる。ここで筆者が前章で引用したハイマンの言葉——「ヒュームがフランスに旅行したときに、これ〔カンティヨンの未刊の書〕を読んだとするならば、功績はカンティヨンのものとならねばならない。しかしもしそうであったとしても……ヒュームもまた注目すべき独創的な経済学者であったことにはかわりはない¹⁶⁾」——という言葉を想起してみれば、ヒュームとカンティヨンの経済思想の対比という問題が生れるのは当然であろう。

ところでヒュームが重商主義の強力な反対論者であったことは、すでに述べた。「ヒュームは、マーカンティリストに対する闘いでスミスの側で手を携えて (comrade-in-arms) 闘った¹⁷⁾」人物である。重商主義は「もちろん統一的な思想体系ではない。およそ15世紀半ばから18世紀半ばにいたるさまざまな近代国家の多様な経済政策、その思想と理論を一括して特徴づけるのに、この言葉が広く使われるようになった機縁は、アダム・スミスが『国富論』で、重農主義 (agricultural system, system of agriculture) および自己の思想体系と対比して批判するため、それまでの経済政策や経済思想を mercantile system または system of commerce と呼んだこと¹⁸⁾」にあるのだが、重商主義は、封建的束縛の解放者として、次に来るべき自由放任主義への過渡的役割をもつ。しかも重商主義の原理は、ほんらい資本合理性である。だから重商主義者にとっては「国家の富裕がどのようにして促進されるか¹⁹⁾」ということが、つねに問題となる。そのば

あい、マーカンティリストは「公財政の管理を私的財産と同一視して、どの国も外国から買う以上に売るのでなければ富裕になることはできない〔として〕，“順なる貿易差額” (*une balance du commerce favorable*)²⁰⁾」を期待した。そして、マーカンティリストが「いちばん望んだことは、外国貿易によって金銀 (*gold and silver*) を手に入れることであり、いちばんおそれたのは、外国貿易を通じて貴金属 (*the precious metals*) を失うことであった。だから国内の商工業奨励策 (*domestic measures for the promotion of industry and commerce*) と並んで、外国貿易の統制 (*the control of foreign trade*) が……もっとも切実な関心事であった。一国は輸出が輸入を超過するそのバランスに対する支払いに金 (*gold*) を受取り、輸入から輸出を超過するそのバランスに対する支払いに金 (*gold*) を支払わねばならない。だから輸出を増進し、輸入を出来るだけ少くすることが、マーカンティリストのプログラム²¹⁾」なのであった。しかも「重要なのは、この《国際収支のバランス》 *balance of payments* であって、そのなかに《貿易収支のバランス》 *balance of trade* もふくまれている²²⁾」という事実である。だが注意しなくてはならない点は——「重商主義者たち《*mercantilistes*》は富と貨幣の蓄積 (*la richesse et l'accumulation de monnaie*) を混同 (*confondre*) し、厳格な規制 (*une réglementation étroite*) に賛意を示し、その上、経済の機構に無知 (*ignorance*)²³⁾であった、と見られる」点である。

東インド会社の重役 (*director*) のひとりであったトーマス・マン (*Thomas Mun*) は「会社の商取引のために一定量の金 (*gold*) を輸出するのを〔むしろ〕弁護した。金を国内に留めておけば、ただ価格をつりあげるだけで輸出を不可能にするに反して、輸出されれば、利潤だけふえて再び輸入されるという理由²⁴⁾」からであった。これに対して、ちょうど正反対な見かたも出てきた。つまり、財貨の「価格が下るときは、輸出が増進されるかも知れないが、その他の面では、商人の利潤を損失にしてしまう

から望ましくない²⁵⁾」という主張であった。ボアギュベール (Pierre le pesant de Boisguillebert) なども「重商主義が富を金銀と同視することを非難し、富は生活上の必需品なканずく農産物のごときものからなるとなした。そして政府は干渉をさし控え、すべからく神の摂理たる自然のはたらきに任すべきである²⁶⁾」といったくらいであった。この2つの見解は、じつは「もっと包括的な原則の異なった特種の場合 (different special case of a more comprehensive principle)²⁷⁾」なのだが、この原則を見出すためには、マーカンティリストなどより、もっと広大な視野をもった人物が必要なのであり——その広大な視野と透徹した洞察力ある経済思想家こそ「前古典学派の理論家 (the pre-classical theorists)、とくに、カンティヨンとヒューム²⁸⁾」だったのである。カンティヨンとヒューム、この前古典学派の2人の理論家に負うところが大きい。

繰返していうようだが——「マーカンティリストの学説で、もっとも誤解に導き易いもの (the most misleading doctrine) は、恐らく、一国は他国を犠牲にしてのみ富裕になりうるという、しばしば、繰返された命題 (the oft-repeated proposition) であった。この点を強調したとき、マーカンティリストは、かれら自身の理論にふくまれる意味を誤解した。その本来の理論は、すでに見たように、じつは蓄積される金 (accumulating gold) に、生産を刺激するというダイナミックな役割 (dynamic role) を見たのであった。マーカンティリストが貿易の双方当事国に与える利益 (the mutual advantage of trade to both) を見いだしえなかった限りでは、彼らに対して、投げかけられた非難は正しかったといわねばならない。マーカンティリストは、いつも、彼らの任務は、固定した貿易量 (fixed volume of trade) から、できるだけ大きい分け前を自国経済のために確保することにあるかのように議論をすすめた。このようにして、彼らは外国ないし植民地の経済的な搾取という近視眼的政策 (shortsighted policy) をあやまって、となえるようになって²⁹⁾」しまったのである。これ

は明らかに誤りであった。マーカンティリストの議論のなかでは、この2つの見解が混合されてしまっていた。「原則をみ出すためには、マーカンティリストより、もっと広い視野 (much broader outlook) が必要」であった。その広い視野をもった人物こそ——“カンティヨンとヒューム”であったのだ。それでは、まずカンティヨンはどんな経済思想をもっていたのか——その点について述べてみよう。

Ⅱ. カンティヨンの経済思想

カンティヨンの生涯については、前章で簡単に述べた。カンティヨンは1734年5月14日（火曜日）の深夜（a.m. 3～4時頃）、ロンドンのアルビマール街（Albemarle Street）の自宅で殺害され、しかも自宅は放火により焼失してしまった。犯人はフランス人、ジョセフ・ドニエ（Joseph Donier）、別名ルバーヌ（Lebane）〔カンティヨンの料理人〕だったといわれている。

カンティヨンが残した唯一の原稿〔つまり『商業本質論』の原稿〕は、ミラボー（Mirabeau）のもとに16年間も所蔵され、ケネー（Quesnay）、テュルゴ（Turgot）、グルネー（Gournay）などに回覧され影響を与えた。カンティヨンの原稿は1730～34年のあいだに書かれたもの〔注.1734年歿〕と推定されるが、死後21年を経て、1755年に匿名で刊行されたものである。「ミラボー（Mirabeau）が、その『人間の友』（L'Ami des Hommes .1756）を仕上げるときに『商業本質論』（1755）をかなり利用した³⁰⁾」ことはよく知られている事実である。

カンティヨンの「現代的意義については、A・ソーヴィ（A.Sauvy）がやりかかっている³¹⁾」すでに「カンティヨンの著作の再刊（réédition）」が出版されているといわれる。

カンティヨンの現代的意義とは何かというと「ジェヴオンズが経済科学

の真の創設者と呼んだのはカンティヨンであり³²⁾」ヒュームではなかったからである。というのは「経済学をともに創始したものとしての榮譽を——ケネーとではないが——スミスといちばん競い得るのは、疑いもなくカンティヨンである。少くとも40年も前に出たスミスの先駆者³³⁾」だからであるという。

ケネーがカンティヨンの著書を利用していたことは、あらためていうまでもないことだが、「——レオンス・ド・ラヴェルニュ (M. Léonce de Lavergne) によると——この書物〔カンティヨンの『商業本質論』をさす〕は、わずかに四六版の大きくない本 (the extent of a moderate duodecimo volume) にすぎないのであるけれども、“およそ経済学者たちのあらゆる理論は前もって、この書物に収められている……” なおまた、フランスの大経済学派の開祖たるケネー (Quesnay) が、そのおもなる主義 (leading principle) を本書から得 (え) 来ったということについても、じっさいの証拠に欠けているわけではないのである。かのユージェーヌ・デール (Eugène Daire) こそは重農主義者の著作集の編者であり——権威として彼の右に出づるものはありえないのであるが——しかるに彼の明らかに指摘するところによれば、ケネーの根本学説 (Quesnay's fundamental doctrine) たる“土地は富の唯一の源泉である” (la terre est l'unique source des richesses) という説は、カンティヨンのこの書物の冒頭の章から借りてきたもののようである³⁴⁾」とジェヴオンズは書いてるし、ケネーの根本学説は——カンティヨンが『商業本質論』の第1篇、第1章「富」の冒頭に書いた「土地はおよそ富の出づる源泉または素材たるものである」 (*La Terre est la source ou la matière d'où l'on tire la Richesse*) とほとんど同文なので——ケネーはカンティヨンの冒頭の章に強く刺激されたものだと推測できよう。

さて、カンティヨンの経済学説の大要を紹介すると——確かに、カンティヨンは「あらゆる富の終極的な源泉はただ土地あるのみ (the sole

ultimate source of all wealth is land)と主張した最初の人であり、労働は単に、この自然の富を³⁵⁾変形するにすぎない (Labor only transforms this natural wealth)」と述べているが——この思想こそフィジオクラットの³⁶⁾不滅の理論たる“循環の理論” (the theory of circulation) の形成の契機となっていく。そして彼は「生産物の価値を3つの異なった“剰余” rent ——あるいは所得 income ——に分け、その一つは地主 (landlord) に、一つは資本家 (capitalist) に、最後の一つは労働者 (laborer) に行く³⁷⁾」とする。さらに彼は「価格メカニズム (price mechanism) の明確な説明³⁷⁾」をおこなう。

カンティヨンのいいたい点は「市場価格 market price は、彼が“内在価値” intrinsic value と名づけた中心をめぐって変動する〔もの〕であるが、この“内在価値 (または実質価値)” は、土地と労働 (生産費 cost of production) によって決定される³⁸⁾」ということなのである。つまり「彼の考えたところでは、人定法 (Les lois positives) は商品の価格を決定することができず、この価格は自然的諸要因の作用によって決定される。……

“内在価値” (valeur intrinsèque) は生産費 (le coût de production) によって決定される³⁹⁾ものだからだという点にある。その理由は「市場価格はつねに内在価値に近づく傾向があるからである。この交換理論 (théorie de l'échange) はすべて古典主義者のそれ (celle des classiques) を予告する⁴⁰⁾もの」であったからである。してみると「価値と市場価格との間の決定的な相互作用 (decisive interaction) を指摘したのは、カンティヨンがはじめ⁴¹⁾てであった」ことは注目にあたいしよう。

貨幣や国際貿易の理論にも、カンティヨンの寄与は多きいものがあるが——紙幅の関係で割愛せざるをえない。

武藤光朗博士は、カンティヨンの経済循環過程の図式化について「カンティヨンによれば、土地の生産物は殆んど相等しい3つの部分 (3つの賃料 le trois rentes) に分たれる。その3分の1は農業者の支出 (彼自身の

必要な生活資料をふくむ)を償うためのものであり、次の3分の1は<利潤>として彼の手に入り、残り3分の1は地主(seigneurs)の手に入る。これらの地主は、自分の受けとる分を都市において消費するが、ここでは総人口の約半数が生活していると想定される。なお農業者はその収獲分の4分の1を都市で生産される工産物の購入のために支出する。だから農業の総生産物の半分($\frac{1}{3} + \frac{1}{6}$)に相当する額は、都市に転移されて商工業者の手の中に入り、彼らは転じてこれを食糧と原材料その他の購入のために支出する。こうしてカンティオンは農業の生産物ないし収入を3種の賃料に分割することから始めて、いくつかの定着点を経て、再び出発点である農業者のところに戻っていく経済循環の過程を図式化して示したのである。カンティオンのこの経済循環の図式をいっそう精密に展開したのがフランソア・ケネー(François Quesnay 1694~1774)の『経済表』(Tableau Economique)に他ならない⁴²⁾と解説しておられるが——この解説をみても、ヘンリー・ヒッグス(Henry Higgs)が「富の循環(the circulation of wealth)にかんするカンティオンの分析にたいして、私はハーヴェー(Harvey)の血液循環の研究と同列の優先権(same level of priority)を与えたい⁴³⁾」という意味がよく納得できるし、カンティオンの『商業本質論』が「前古典学派文献の頂点(climax)をなす⁴⁴⁾」理由もよく納得しうる。

カンティオンの遺著が——ヒュームの著作より遅れて出版されたことは事実であるが——ヒュームのものより遙か以前に書かれていたのであるから——「ヒュームの手柄は、この彼よりは年長のカンティオンとわかつたねばならないか、あるいはカンティオンの未刊の稿は16年もフランスに埋もれていたものであり、想像されるように、ヒュームがフランスに旅行したときに、これを読んだとするならば、功績はカンティオンのものとならねばならない⁴⁵⁾」はずであり——してみると、カンティオンとヒュームの経済思想を比較してみたいというジェヴォンズの着想はすぐれて説得的なものであ

ったといえよう。

そこで筆者は、カンティヨンの『商業本質論』とジェヴォンズの「リチャール・カンティヨンと経済学の国籍」に述べられているカンティヨンの経済思想と——ヒュームの経済思想つまり、ヒューム『経済論集』(.Hume. Writings on Economics) (田中敏弘訳)、ならびに田中氏のすぐれた労作『社会科学者としてのヒューム』(未来社刊)を参照しつつ——山崎怜氏によると「田中の訳書と著作は経済学史的なヒューム像の新時代の幕あけ⁴⁶⁾」と賞讃されているもの——カンティヨンとヒュームの経済思想を比較してみることにした。

まずカンティヨンの『商業本質論』は3篇(3 parts)に分かれている。第1篇は17の章(chapters)から、第2篇は10の章から、第3篇は8つの章から構成されている。ジェヴォンズによると——「その第1篇(first part)は或る程度まで経済学の一般序論たるものであり、まず富の定義をもってはじまり、次いで社会、村落、町、都市、首府(capital cities)における人間交際を論じ、労賃、価値理論を論じ、土地と労働の評価(par)を論じ、あらゆる階級が地主に依存するものなることを論じ、人口の増加、金銀の用(the use of gold and silver)について述べている。第2篇は、交換(barter)、価格、貨幣の流通、利子などの問題を取りあげ——およそ通貨(currency)にかんする最も完全なる小論文である。おそらくは、およそ、この問題について、その後発表せられた同大(same size)のいかなる書きものよりも深遠なものである。第3篇は、外国貿易(foreign commerce)、外国為替(foreign exchange)、銀行業(banking)および“信用の練りあげ”(refinement of credit)について述べている。その当時の知識、経験から判断するならば——この第3篇こそは、ほとんど讃歎を絶する(almost beyond praise 称讃の言葉がないくらいの)ものである。そして、この篇〔第3篇〕の示すところによれば、リチャール・カンティヨンこそは、数多の問題について正確かつ、ほとんど完全な理解を

もっていた⁴⁷⁾」といえるばかりか、カンティヨンの「この“論考” Essai^{。。。。。}こそは、ただ単なる論文とか、またヒュームの論集のような、論文の寄せ集め (collection of disconnected essays) などよりも、遙かに上々のものである。本書こそは、系統的な脈絡ある論文であり、およそ課税の問題を除く、ほとんど経済学の全分野にわたって簡潔な論述をなしているところのものである。かくて本書こそは——私の知るかぎり——およそ他のいかなる書物にもまして、経済学の第1の論作 (the first treatise on economics)⁴⁸⁾」であり、カンティヨンの「この<論考> (Essai) こそは、およそ他のいかなる労作にくらべても、いっそう明確に“経済学の揺籃” (the Cradle of Political Economy)⁴⁹⁾たるもの」だとい切っている。

またジェヴォンズは——「第1章“富” (Of wealth) の冒頭の文章はとくに注目すべきである。すなわち次のごとし。“土地はおよそあらゆる源泉または素材たるものである。人間の労働は富を生産するところの形式である。しかして富そのものはただ、生活の保持、便益、快樂たるにすぎないのである”——この文章こそは、経済学の基調 (Key note) あるいは本筋 (ほんすじ (leading chord)) を衝 (つ) くものである。これは、かのアダム・スミスのしばしば繰り返している“一国の土地および労働” (land and labour of the country) なる言葉をすぐさま思い起こさせるのである。しかし、この文章こそは、その後にあられた、ほとんどいかなる論文よりもよく2つの生産要素の間の釣合いを保っているのである。かのケネーは、カンティヨンの或るほかの言葉に不当の重みを帰し、もっぱら土地のみに依存する全く一面的な経済学説 (one-sided system of economics) をつくりだしたのである。しかるにスミスはかえって別の方へと走り“各国民の年々の労働” (the annual labour of every nation) をもって生活上のあらゆる必需品、便益品をこれに供するところの根源であるとなす。カンティヨンの記述こそは、これを妥当に解するとき、おそらくは今までの最も正確なる記述たるであろう⁵⁰⁾」と述べ、また「第7、8

章は興味ぶかいものがある。というのは、ここにアダム・スミスの重要な説の萌芽 (germ) がみいだされるからである。その説とは、ほかでもない『国富論』の第10章の第1節に述べられている、もろもろの職業における賃金にかんする説がこれである。スミスはその説を大いに発展し、これを、すこぶる美事に説明しており、全く自分のものにしてしまっているのである。しかしそれでもなお、この忘れられたる「カンティヨンの」Essai のなかには指導的見解 (leading ideas)⁵¹⁾が残されている。つまり「スミスは賃金の不平等をきたす事情として5つを挙げたのであるが、しかるに、その3つを、ここカンティヨンの「Essai」にみとめることができるのである。その3つとは、すなわち職業そのものの快・不快、職業習得の難易および廉不廉 (dear and dearlessness)、職業をおこなう人のおかるべき信用の大小これである⁵²⁾」という。また、第10章においては「最も巧みなる価値理論 (an ingenious theory of value) がみられる。これはある点において、最近の多くの経済学者の理論にまさるものである……カンティヨンのいう意味は、すなわち品物たとえば、ブラッセル・レース (Brussels lace) のごとき、またイギリス時計の発条 (balance-spring) のごときものの価値は、その生産に投ぜられる労働によるというのである。しかるに他方において、牧場からの稈 (干し草 hay) や森林からの材木のごときものの価値は、これに含まれる材料によって支配されるか、またはその生産に要する土地の面積によって支配されるのである。尤 (もっとも) も、この場合、土地の良否というものは考えに入れられるのである。セイヌ河の水の値段 (the price of Seine water) のごときは、あたかも他の場合と同様、水そのもの——その分量はおびただしい——の値段ではなくて、これをパリの市街へ運んでくる代償なのである。かくて彼は、次のような結論に達する……およそ一つの物品の価格または真実価値 (the price or the intrinsic value of a thing) は、その生産に入り込む土地および労働の量 (the quantity of land and labour) をば測り示す尺

度たるもの〔なの〕である。尤（もっと）も、この場合、土地の良さまたは生産高および労働の質についても考量が加えられる⁵³⁾べきであると。のみならず、カンティオンは価格について、さらに具体的な指摘をしている。

「物品は必ずしも、その“真実価値”において売られるものではない。今もし貴人が多大のお金を投じて美しき庭園をつくり、しかもこれを競売(hammer)に付するにおいては、これはおそらく、そのかかった費用の半分をももたらすにすぎないであろう。また場合によっては、2倍をもたらすことになるかも知れない。なおまた穀物のごとき、その豊凶によって、その真実価値よりも以上または以下に売られるのである。およそ価格の絶えざる進退(perpetual flux and reflux)は、供給を需要に相応する〔こと〕の不能よりして起るのである。要するに、これらの僅少の頁には——ただに市場価値(market value)と費用価値(cost value)すなわち故ケアンズ教授のいわゆる正常価値(normal value)とを対照した学説全体の含まれているのみならず、またリカードウ(Ricardo)、ミル(Mill)そのほか数多の人びとが見のがした、もろもろの困難についても暗に言及⁵⁴⁾してしていることがわかるであろうと。

老練な銀行家カンティオンの着眼は、まさに賞讃に価するものといえよう。第11章では、アダム・スミスによって引用されている興味ぶかい説をみることができる。カンティオンの指摘では「およそ最も下級なる成人奴隷1名の労働の値打ちはどれくらいかという、少なくとも、彼の生活のために所有者の割当てざるべからざる土地の量と、および子供ひとりとその労働に適する年齢まで養うべき土地の量の2倍と、それだけの値打ちがある⁵⁵⁾」ことになっているが、スミスは『国富論』第1篇、第8章において、このカンティオンの説を引用しているのである。『国富論』第1篇(Book 1)のⅧ.“労働の賃金について”(of the Wages of Labour)からの引用は——紙幅の関係で、ここでは割愛するが——スミスは『国富

論』で、カンティヨンの *Essai* から多くを引用し、また、しばしばカンティヨンに言及している。

第12章においては、われわれは、カンティヨンの『商業本質論』(*Essai*) のなかに重農主義説の萌芽をみることができる。つまりカンティヨンは、“一国のあらゆる階級、個々人は地主の費用にて生きまたは富む”と明言し、“農夫の3つの地代 (*les trois rentes*)こそは一国における流通の主要源、いわば原動力 (*le premier mobile*) と見做す”ことができる⁵⁶⁾と述べているからである。「ケネー自身ならびにその編輯者も率直に、フランスの大経済学派の起源をこの〔カンティヨンの〕 *Essai* に帰している」とジェヴォンズは結んでいる。

以上、きわめて概説的であったが、カンティヨンの経済思想の概要を知りえた。

次に、ヒュームの経済思想について述べよう。

Ⅲ. ヒュームの経済思想

ヒュームの生涯については、前章で述べた。アダム・スミスの親友であり——いかに、スミスとヒュームが親しい関係であったかということは、スミスが『国富論』を出版するために、ロンドンに行こうとした時、体の衰弱があつて途中で急死する危惧を感じたことがあつた。その時スミスはヒュームに手紙を書いて、もし途中で死ぬようなことがあつたら、原稿だけはぜひ公刊して欲しいと依頼して故郷を旅立ったという有名な話があるくらいスミスとヒュームは親しい関係であつた——かつ、スミスに大きな影響を与えたヒュームの経済思想は彼の『政治論集』(*Political Discourses*, 1752) 等の著書にみることができる。「ヒュームが1776年〔8月25日〕その生涯を閉じたときには、〔彼は〕哲学者であるよりは、わずかに『政治論集』の著者として、また、殆んどは歴史家として知られたにす

ぎなかつた⁵⁷⁾」そうである。ただ「注目すべきことは、哲学者ヒュームと経済学者ヒュームとに何の関連も求められていないことである。それは今日でも哲学者ヒューム、経済学者ヒューム、歴史家ヒュームを統一的に捉える⁵⁸⁾という気運が熟していない事情とともに注目に値する」と小松氏は述べている。

ここでヒュームの生きた時代、とくに彼の著作の多く刊行された1720年代から50年代のイギリス社会の当面していた経済問題という「国内的には産業革命の前夜に当り、富の蓄積に集中していた。経済は、この世紀前半の戦争に必要な財政制度として創出されたイングランド銀行をはじめ、巨大な金融会社がいちじるしく発達した。これらの機関は、政府の発行する国債の引受者となり、国債のいちじるしい増大にともなう、大きな経済的・政治的勢力となった。これらの銀行・金融業の成長は、信用の巨大な拡張、多量の資本をその使用が最も有利であるところに容易にかつ迅速に使用するという可能性、そして通常取引の成長とならんで株式および商品投機制度の成長⁵⁹⁾」がみられた時代であった。

ところで、近年、田中敏弘氏の労作『社会科学者としてのヒューム』(1971年、未来社刊)によると、田中氏は「ヒュームの経済思想の基調を“インダストリー”に求め、それをいわば導きの糸として、彼の経済思想を全体として見渡してみようとした⁶⁰⁾」と述べ、かつてジェヴォンズが“脈絡なき論文の寄せ集め”と酷評した『政治論集』批評をくつがえして、ヒュームの経済思想の基調を“インダストリー”に求めて——インダストリーをライト・モチーフとして統一的解明をみごとに完成している。少なくとも経済思想の底流を掘りあてたことは田中氏〔とロートワイン教授〕の功績といえよう。

では、インダストリーとは何か。田中氏によれば、「一言でいえば、インダストリーの増大は国民的生産性の増大の尺度とせられ、経済発展の指標とせられているのである。この意味からすれば、インダストリーはひろ

い意味での産業活動とも訳されるべき内容を示す⁶¹⁾という。また「ヒュームにおいては、〔その〕経済活動は特殊な人間的自由の実現の具体的な形態としても注目されることになった。経済活動の中枢をなすインダストリーは、ヒュームによれば、すぐれて人間的活動⁶²⁾」なのである。

さてヒュームは、経済論文を書きはじめるに当って“商業について”(Of Commerce)の冒頭で一般原理を述べている。「人類の大部分を2つの部類に分けることができるであろう。真理に達することのない浅薄な思想家(shallow thinkers)の部類と、真理をとび越えたような難解な思索家(abstruse)の部類とがそれである……どこのコーヒー店の座談からでも学べるようなことをしか教えてくれないような著述家は、ほとんど尊重するに値しない⁶³⁾」ものであり「広い視野からえられた結論は、たとえ明確に表わされていても、こみいって曖昧にみえるのである。しかしどのように、こみいって(intricate)みえるにしても、一般原理(general principle)は、それが正しくて確実である限り、特殊な場合には妥当しないことがあるとも、事物の一般的なりゆき(the general course of things)にあっては、つねに貫徹しているに違いなく、この一般的なりゆきに注目することは、学者の主要な仕事なのである⁶⁴⁾」と強調する。田中氏は「理論的抽象による一般原理確立の方法は、いうまでもなく経済理論構成への正しい接近方法であり、哲学者ヒュームにみられる優れた特徴のあらわれでもある。ヒュームにおけるこうした<原理>は明らかにどこまでも経験的性質を基礎にもつものであり、かれにおいては、経験的性質をもたない、たんなる仮説的命題としての<原理>はありえない⁶⁵⁾」のであると述べ、ヒュームの経済思想の基調をなす“技術と産業活動”(art and industry)の増大についても田中氏は「このインダストリーの増大が全論文を通じてのテーマとなり、各論文のリフレインを形づくっている。たとえば、利子論では利子率低下の原因は、このインダストリーの増大であり、けっしてたんなる貨幣量の増大ではないことが主張せられているし、また

租税論での問題も、租税はいかにすれば国民のインダストリーを刺激し、これを害わないかということである。さらに公信用についての主張も、公債が国民のインダストリーをいかに害するかにある……このようにヒュームにおいては貨幣の増大はインダストリーの増大の結果にすぎない。インダストリーが保持される限り、貨幣は問題ではない。この意味において、ヒュームの各経済論文における主張の原理は、貨幣量の関心からインダストリーの尊重への転換をはっきり示しているのである。つまりヒュームにおける経済現象に対する根本的態度は、貨幣的世界から実物的世界への転換を明らかに指向しているということができるであろう。このライト・モティーフを見失うならば、ヒュームの経済論文は個々ばらばらのものになってしまう、かれの経済理論を全体として把握することはできないであろう⁶⁶⁾と解説している。

それでは、田中氏の訳されたヒュームの『経済論集』(東大出版会, 1980) (David Hume, Political Discourses, Edinburgh, [1st ed., 1752]) によってヒュームの主張を検討してみよう。

ヒュームの“技術における洗練について”(Of Refinement in the Arts)でヒュームはいう「産業活動と諸技術とが栄えている時代には、人々は絶えず仕事に従事し、労働の果実である快樂だけでなく、仕事じたいをもその報酬として享受する。精神は新しい活力(new vigour)を獲得し、その力と能力とを増大する。そして実直な産業活動(honest industry)に精励することによって、自然な欲望を満足させるだけでなく、安易と怠惰とに養われたさいに通常生ずる不自然な欲望の成長をも妨げる。こうした技術を社会から放逐するならば、それは人々から活動をも快樂をも(both of action and of pleasure)奪うことになるだろう」(p.21)と述べ「このようにして、産業活動と知識と人間性とは、解き難い鎖でつなが合わされているのであって、それらがいっそう磨きあげられた、そして通常いっそう奢侈的時代(the more luxurious ages)に特有なものであるこ

とは、理性によってだけでなく、経験によってもわかるのである」(p.23)といい、確かに「奢侈 (Luxury) は度を過せば多くの害悪の源となるが、しかし一般には、不精 (sloth) や怠惰 (idleness) よりはまし」(p.32)だし、「道徳的に無害な奢侈 (innocent luxury)、つまり技術と生活の便益品とにおける洗練は国家に有益」(p.30)と考えねばならぬという。

つまりヒュームは“道徳的に無害な奢侈”を正しく捉えて、奢侈への欲求を人間活動の基本において、市民社会の形成・発展の不可欠の推進力として正しく認めていたことがわかる。

“貨幣について”(Of Money)では、ヒュームは「国民の数とその産業活動とが相対的に大きいことは、国の内外、公私を問わず、すべての場合に有益 (serviceable) である。ところが貨幣の相対的な豊富は、それを役立てる場合がきわめて限られており、ときには外国人との商業上、国民にとって損失となることすらある」(p.34)であろう。したがって「一般に、貨幣の豊富 (plenty of money) にもとづく、あらゆる物の高価は、基礎の確立した商業にともなう不利益 (disadvantage) であり、すべての海外市場において、貧国が富国よりも安く売ることができるようにして、どんな国の商業にも制限を加える、とのべることができよう。このことは、どの国民にも有利だとひろく一般にみなされている銀行および紙券信用 (banks and paper-credit)の便益に関して、わたくしに疑問をもたせた。食糧と労働 (provisions and labour) とが交易と貨幣との増大によって高価となれば、それは多くの点で不利益 (inconvenience) であるが、このことは避け難い不利益であり、われわれのすべてが望む目的である国家の富や繁栄の結果」(p.35)なのである。しかし「このような紙券信用 (credit) を人為的にふやそうと努力することは、およそ商業国 (trading nation) の利益ではありえない。それどころか、それは、労働と財貨とにたいする自然的な比率 (natural proportion)以上に貨幣を増加させ、

その結果、商人と製造業者とにたいして、それらの価格を高騰させて、国民に不利益を与えるに違いない」(p.35~36.。印引用者)したがって、「外国貿易についていえば、非常に多量の貨幣は、あらゆる種類の労働の価格を騰貴させて、むしろ不利益であると思われる」(p.37)という。だから「われわれは、貨幣量がヨリ大であるかヨリ小であるかは一国の国内の幸福(domestic happiness)に関しては、少しも重要な問題ではないと結論することができよう」(p.39)といい、要するにあらゆる物の価格が財と貨幣との間の比率に依存し、いずれかに相当な変動(any considerable alteration)があれば、それは価格を引上げるか引下げるかのいずれにせよ、同種の結果をもたらすということは、まず自明の原理と思われる。財貨が増加すれば、それは安価となり、貨幣が増加すれば、財貨は価値において騰貴する。他方、これと同様に、前者の減少と後者の減少とは、これと反対の傾向をもつ」(p.41~42)といいうる。つまり「物価を決定するのは、流通する貨幣と市場にある財貨との比率である……比率が貨幣の側において低下する〔ばあい〕、あらゆる物はヨリ安価になるに違いなく、物価は次第に下落する」(p.43)と述べている。

ハイマンがヒュームの“貨幣の理論”を高く評価して、スミスさえ辿りつけなかった理論をヒュームが速くも剔抉していると述べ、「貨幣の理論では、スミスの業績(Smith's achievement)は、明らかにカンティヨンやヒュームに及ばない(falls distinctly short of that of Cantillon and Hume)⁶⁷⁾」。むしろ“スミスの貨幣の知識には退歩(retrogression)がみられる”といったのは、この貨幣理論のことである。

次の“利子について”(Of Interest)においてヒュームはいう「利子の低いこと(the lowness of interest)ほど国民の繁栄した状態の確かなしるし(certain sign)となるものは考えられない……利子の低いことは一般に貨幣の豊富に帰せられている。しかし貨幣は、いかに豊富であろうと、その量がきまってしまうと、労働の価格を騰貴させる以外の結果をも

たない」(p.47. 傍点原著者)ものである。たとえば「物価は西インド諸島の発見以来、ほぼ4倍に騰貴した。そして金銀がさらにいっそう増加したというのにはありそうなことである。ところが利子は半分以上には下落することがなかった。したがって利子率(rate of interest)は貴金属の分量からはひきだされない」(p.48)ものだということがわかる。「高い利子は、3つの事情(circumstances)すなわち、借入需要(demand for borrowing)が大であること、その需要をみたす富が小であること、および商業から生ずる利潤が大であることから生ずる。そしてこれらの事情は、金銀の稀少をではなく、商工業がわずかしき進歩していないことを示す明白な証拠なのである。一方、低い利子は、これと正反対のつぎの3つの事情、すなわち借入需要が小であること、その需要をみたす富が大であること、および商業から生ずる利潤が小であることから生ずる。そして、これらのもろもろの事情はすべてたがいに関連しており、金銀の増加からではなく、工業と商業(industry and commerce)との進歩から生じてくる」(p.49. 傍点原著者)ものなのである。だから「利子率の差異は、貨幣量(the quantity of money)にではなく、一般に広まっている慣習と生活態度(habits and manners)とに依存する。借入需要の増減はもっぱらこれによる」(p.50)と考えられる。だから「利子は国家<の状態の>バロメーター(barometer)であり、その低いことは、国民の繁栄している状態のまず間違いのないしるしである。低利子は産業活動の増大と、その国家全体に及ぶ速やかな流通(prompt circulation)を証明する」(p.55)ものである。「イギリス、フランスおよび金銀の鉱山をもたぬヨーロッパの他の国に生じた利子の低落(the reduction of interest)についていえば、それは漸次的であつたのであり、たんにそれじたいとして考えられた場合の貨幣の増加から生じたのではなく、この貨幣の増加が、労働と食糧との価格をそれが騰貴させる以前のあの中間の期間において、おのずからもたらす産業活動の増大から生じたのである」(p.59)とい

いうる。

また“貿易差額について”(Of the Balance of Trade)においてヒュームは「商業の本質を知らぬ諸国民が、財貨(commodities)の輸出を禁止し、価値と有用性とをもつと彼らが考えるものはなんでも自国内に保持するのは、ごくありふれたことである。アテネの古代の法律はいちじく(figs)の輸出を有罪とみなしていた。というのは、いちじく(figs)はアッティカでは非常に美味な果物の一つと思われていたため、それはおよそ外国人の口(くち)には上等すぎてもったいないとアテネ人が考えたからであった。……今日でもフランスでは、穀物の輸出は、飢饉に備えるためということで、ほとんどいつも禁止されている。しかし、この禁止ほど、あの肥沃な国をあれだけ困窮させている頻繁な飢餓(the frequent famines)の原因となっているものがほかにはないことは明白である。」(p.60)それどころか「貨幣にかんしても、これと同じし^っとと深い危惧(same jealous fear)がいろいろの国民のあいだに広くゆきわたっている。こうした禁止が為替相場を不利にして、さらに多くの貨幣輸出をもたらす以外、なんの役にも立たぬということを、いちいちの国民に納得させるには、理性と経験との両方が必要であった……商業によく通じた諸国民においてさえも、貿易差額(balance of trade)に関する激しいし^っと(strong jealousy)と、金銀がすべて自国から流出しつつあるのではないかという危惧の念とが、やはりひろく支配している。だがこれは、ほとんどどんな場合にも、いわれのない懸念(a groundless apprehension)だとわたくしには思える……国民と産業活動との優位を細心に維持しよう。そうすれば、少しも貨幣の喪失を懸念するには及ばない」(p.60~61)のである。「以上の諸原理からわれわれは、ヨーロッパのすべての国民や、それと同様にイギリスが、貿易に課してきた無数の障壁や妨げや関税(bars, obstructions and imposts)について、それらをどのように判断すべきかを知りうる。これらの政策は、流通する限りは、その水準以上にけっして

蓄積できぬ貨幣を貯えようとする過度の願望からか、それともその水準以下には、けっして下落しない正金 (specie) を失いはせぬかという根拠のない懸念から生じたものなのである。かりにわが国の富を散失させるものが何かあるとすれば、それは「以上のような」諸々の愚かな考案 (impolitic contrivance) であろう」 (p.75) と思われる。たとえば「ドイツのリンネル (German linen) に対する関税は、国内の製造業を奨励し、それによってわが国の国民と産業活動とを増大させる……もしぶどう酒の関税 (the duties on wine) が $\frac{1}{3}$ に引下げられたならば、政府の関税収入はかえって現在よりもはるかにふえることはまず疑えない。これによって、わが国民はもっと良質で健康によいぶどう酒を日常飲むことができようし、一方また、われわれの大いに懸念している貿易差額がそこなわれるという、いわれのない恐れもけっしてないであろう」 (p.76) と述べ、考えてみると——「千年以上のあいだヨーロッパの貨幣は、広くはげしい流れをなしてローマに流入し続けていた。しかし、それは、人に知られぬ、目に見えない多くの水路によって空 (から) になってしまった。そして商工業の欠如 (the want of industry and commerce) は現在ローマ法王領 (the papal dominions) をイタリー全土で一番貧しい地域にしているのである。要するに、政府には自国の国民と製造業とを注意深く保持すべき大きな理由がある。その貨幣は、懸念やしっと (fear or jealousy) をもつことなしに、人事のおもむくまに^{まか}委しておいて安全であろう」 (p.77) という。

ここで、ヒュームが国際分業の利益と自由貿易の利益を強調し、貨幣的貿易差額に固執するマーカンテリズム政策をハッキリ批判していることがわかる。

次の“貿易上のしっとについて” (Of the Jealousy of Trade) では、ヒュームは「商業上なにほどこか進歩をみせている国家のあいだで、近隣の諸国民の進歩を疑い深い眼 (a suspicious eye) で見、貿易国をすべて競

争相手 (rivals) とみなし、いずれの国も近隣の諸国民を犠牲とせずには
繁栄しえないと考えることほど、ありふれたことはない。こうした偏狹で
悪意ある見解に反対して、わたくしは、あえてこう主張したい。すなわち、あ
る一国民の富と商業との増大 (the encrease of riches and commerce)
は、その近隣の諸国民すべての富と商業をそこなわないどころか、それら
を促進するのが普通であり」 (p.78)、明らかなことだけれども、「一国民
の国内産業 (domestic industry) は、近隣の諸国民が最高に繁栄したから
といって害を受けることはありえない……国内産業の発達 は 外国貿易の基
礎を築くものである。多量の財貨 (commodities) が国内市場向け (for
the home-market) に生産され、完成されているところなら、利をともな
って (with advantage) 輸出しうる何ほどかのものはいつでも見出される
ものである」 (p.79)。だから、「いかなる国も、近隣の諸国民が一切の
技術と製造業 (art and industry) とを改良してしまつて、自国にはかれ
らのほしがるものがなくなつてしまひはせぬかなどと気づかうには及ばな
い……どの国においても、技術 (arts) が進歩すればするほど、産業の盛
んな近隣の諸国民への需要はますます多くなるものなのだ。住民が富裕
(opulent) になり、熟練 (skilfulness) をもつようになると、どんな財貨
でも最高の出来 (the utmost perfection) のものがほしくなる。それに、
そういう住民は、交換に与えうる財貨を豊富にもっているから、どの外国か
らもたくさん輸入する。こうして輸入元の諸国民の産業活動 (industry)
が刺激される。一方、その住民じたいの産業活動もまた、交換に与える財
貨の販売 (the sale of the commodities) によって発達する」 (p.80)
ものなのである。

このように外国貿易による貨幣総量の変化にかかわらず、貨幣量は、い
つも湖水の水位のように一定の水位を保つものである。「隣接するあらゆる
国民のあいだで貨幣をたえず各国民の技術と産業活動とにほぼ比例する
ように保持させる (*preserve money nearly proportionable to the art and*

industry, of each nation) に違いない。以上は明らかなことである。水はすべてそれが疎通するところでは、いつも一定の水準を保つものである。*(All water, whenever it communicates, remains always at a level)*……もし、水がある一箇所高くなれば、その部分のヨリ大きい重力は平衡を保っていないから、平衡を保つまでその部分を押し下げる」(p.63)というヒュームの主張から、当時の貿易差額論に立つ経済政策が、ヒュームによって批判されていることを容易に知りうる。

“租税について”(Of Taxes)において、ヒュームはいう「最良の租税は、消費ことに奢侈的消費にかけられるような租税である。なぜなら、このような税は国民に感じられることが最も少ないからである……それは徐々に、そして知らず知らずのうちに支払われる。それは、分別をもって〔思慮ぶかく〕課徴される場合には、自然に節制と節儉〔冷静と質素〕とを生み出す。また、それは財貨の自然価格と混同され、消費者にはほとんど気づかれない。その唯一の欠点は、徴収(levying)に費用がかかる」(p.85)ことである。また、土地単税論と称する違った意見もあるけれども、「しかし、すべての租税が最後には土地にかかるということは承認されえない。もし、ある職人(an artisan)の消費するなんらかの財貨に税が課せられるとすれば、彼にはそれを支払う2つの明白な方策〔方便expedients〕がある。つまり、かれは支出を幾分切りつめるか、それとも労働をふやすであろう。こうした方法(resources)は双方とも、かれの工賃(wages)を引上げる方法よりも、たやすいしまた自然である」(p.87)というのは「不作の年に織布工が消費を減らすか、それとも労働をふやすか、あるいは、こうした節儉と勤勉との方策を2つとも用いるかして、その年の終りまで持ちこたえうるのを、われわれは〔よく〕知っている」(p.87)からである。いずれにせよ「じっさい職人が、かれの労働の価格を引上げずに勤労と節儉とを増大しても、独力で支払えないような租税は、非常な重税であり、またきわめて無分別に課徴されたもの」(p.88)

といえる。

次の“国家信用について”(Of Public Credit)では「公債はわれわれにとって一種の貨幣となり、時価で金銀と同じほど容易に通用している」(p.93)。だから、貿易商人(merchant)は現金を手許にもとうとしないのは、このためである。「銀行債(Bank-stock)や東インド会社債(India-bonds)、ことに後者は、現金と同じすべての目的に役立つ。なぜなら、かれはそれらを15分間で処分したり、銀行家に抵当(pledge)として差出したりすることができるからである。また同時に、それらの債券は、かれの机のなかにあるときでも遊んでいるのではなく、かれに経常的な収入をもたらす。要するに、わが国の国債(national debts)は貿易商人たちの手中でたえず増殖し、かれらの貿易の利潤のほかに確実な利得を生み出す一種の貨幣を、かれらに与えるものである。このことは、かれらがより低い利潤《率》で貿易をおこなうことを可能にするに違いない。貿易商人のこの低利潤《率》は、財貨をいっそう廉価にし、より大きい消費を呼び起し、庶民の労働を促進し、技術と産業活動(arts and industry)とを全社会のすみずみにまでひろげるのに役立つ」(p.93~94)ことは確かであるが「公債(public stocks)は、一種の紙券信用(paper-credit)であるから、この種の貨幣にとまなう不利益をすべてもっている……

〔たとえば〕、公債の利子を支払うために課せられる諸税は、労働の価格を騰貴させるか、それとも貧民階級への圧迫となるかのいずれかの傾向」(p.95~6)をもつことになる。国債(national debts)はさまざまな不利益(disadvantages)をもつ。また、「国民がその債務に心からうんざりするようになり(when the nation becomes heartily sick of their debts),〔さらに〕、また債務のために苛酷な圧迫を受けるとき」には、国家信用が崩壊することもありうる。「国家は、だれもそれに支払いを強制できない債務者(debtor)である」(p.105)と。つまりヒュームは国債発行に反対する。大野精三郎氏は「ヒュームは頑迷な古いジェントリーの

立場に固執していない。土地課税のほかに、インダストリーを阻害しないかぎり消費税を主張していることは、1730年代の消費税論争においては、Modern Whig の立場にたっているとみることができよう。ヒュームが Modern Whig の経済政策のなかで最も激しく反対したのは、その国債発行であった……反対理由は、それが中産階級、別して土地所有者階級の経済的地盤を急速に破壊し、その階級がもつ政治的役割を失わせることであった⁶⁸⁾」からであると解説している。

以上でヒュームの経済思想の概要を知ることができるであろう。〔人口思想については紙幅の関係で次号で述べる〕。確かにハイマンのいうとおり——貨幣数量説 (the quantity theory of money) から出てくる結論，“ひとたび固定されたならば”——「流通する貨幣の数量は、国民の幸福に何の影響もない……ということをヒュームほど厳格に述べたものはいない⁶⁹⁾」ことがわかるし「国際貿易の理論 (the theory of international trade) でもまた、ヒュームはカンティヨンを超えて先に進んだ⁷⁰⁾」事実を確認しえた。また田中敏弘氏のすぐれた研究が示しているように——ヒュームの経済論は一見したところ断片的なものに見えるかも知れないが——「インダストリーの増大が全論文を通じての“テーマ”となり、各論文のリフレインを形づくっている⁷¹⁾」こともわかる。

しかし、筆者が疑問に思うことは——少しく注意して読むと——カンティヨンの『商業本質論』とヒュームの『経済論集』のあいだに、極めて類似の文章がみとめられることである。たとえば、カンティヨンの「いやしくも一国における貨幣の乏しかろうとまたは潤沢であろうと、この割合は大した変りはない」(p.131. 邦訳105頁)とヒュームの「ある国をそれだけとって考察するならば、貨幣量の多少がなんら問題ではない」(p.33. 邦訳48頁)とは酷似している文章だし、カンティヨンの第4章“市場町”(Of Market Towns)のなかの文章、「値段は売りに出されたる生産物とそれに向かって産出されたる貨幣との割合によって定まる」

(p.13) とヒュームの“貨幣について” (Of Money) のなかの文章, 「物価を決定するのは, 流通する貨幣と市場にある財貨との比率である」 (p.43) とか「あらゆる物の価格が, 財貨と貨幣との間の比率に依存する」 (p.41) とは全く類似の文章だし, またカンティオンは第2篇第10章“一国における金利の増減の原因” (Of the Causes of the Increase and Decrease of the Interest of Money in a State) のなかの「一国における貨幣の潤沢または払底は……利子率とは必ずしも関係はない」 (p.215) という文章とヒュームの「貨幣の豊富が低利子の原因だと主張してきた人びとは副次的な結果を原因と取り違えたものと思われる」 (p.56) とは内容からいうと全く同じである。

ここにカンティオンがヒュームに与えた経済思想の影響の痕跡は捉ええたように思えたが, われわれが哲学者, 経済学者, 歴史家ヒュームを総合して考えた場合——カンティオンの影響は, たんに経済学にかんするものだけであるから——どこかにその限界が生ずるはずである。その辺が依然として筆者には不明である。

なお小論のテーマを経済思想家としてのヒュームとカンティオンと改題したことを付記する。

David. Hume の日本語名について, ディヴィッド・ヒュームと書いている人 (たとえば, 戸田正雄氏), また, デュヴィッド・ヒュームと書いている人 (たとえば, 大野精三郎氏), また, ディヴィッド・ヒュームと書く人 (たとえば, 田中敏弘氏) などがあるが, 小論では, ディヴィッド・ヒュームとしておく。

カンティオンとヒュームの人口思想の対比は, 次号で述べることにしよう。

注 1) 山崎正一『哲学の近代的構図』昭和24年, 角川書店, 182～183頁, 印引用者。

2) 同書, 229頁, 印引用者。

- 3) 同書, 189 頁, 。印引用者。
- 4) H. Störig, *Kleine Weltgeschichte der Philosophie*, op. cit., S.244.
- 5) 山崎正一, 前掲書, 184 頁。
- 6) 田中敏弘『社会科学者としてのヒューム』1971 年, 未来社, 17～18 頁。
- 7) 同書, 206～7 頁, 。印引用者。
- 8) W.S. Jevons. *On Richard Cantillon and the Nationality of Political Economy*, Reprints of economic classics, Augustus. M. Kelley. Bookseller, New York, 1964. p.334.
- 9) ibid., p.333. 傍点原著者。
- 10) ibid., p.334.
- 11) ibid., p.342. 傍点原著者, 。印引用者。
- 12) ibid., p.353.
- 13) ibid., p.353. 。印引用者。
- 14) ibid., p.353. 。印引用者。
- 15) J. Schumpeter, *Epochen der Dogmen-und Methodengeschichte, Wirtschaft und Wirtschaftswissenschaft*, 1924, S.32. 。印引用者。
- 16) E. Heimann, *History of Economic Doctrines*, op. cit., p.44. 。印引用者。
- 17) ibid., p.44.
- 18) 武藤光朗『経済学史の哲学』昭和 49 年, 創文社, 57 頁。
- 19) Emile James. *Histoire sommaire de la Pensée économique*, op. cit., p.38.
- 20) ibid., p.40.
- 21) E. Heimann, op. cit., p.40. 。印引用者。
- 22) ibid., p.33.
- 23) E. James, op. cit., p.40. 。印引用者。
- 24) E. Heimann, op. cit., p.34.
- 25) ibid., p.34.
- 26) 戸田正雄『経済学説史』日本評論社, 昭和 45 年, 61 頁, 。印引用者。
- 27) E. Heimann, op. cit., p.34.
- 28) ibid., p.34. 傍点原著者, 。印引用者。
- 29) E. Heimann, op. cit., p.35. 傍点原著者, 。印引用者。
- 30) A. Skinner. *A System of Social Science, Papers relating to Adam Smith*, Clarendon Press, Oxford, 1979. p.125.
- 31) E. James. op. cit., p.59.

- 32) *ibid.*, p.59.
- 33) E. Heimann, *op. cit.*, p.40. ◦印引用者。
- 34) Jevons, *On Richard Cantillon*, *op. cit.*, p.353~4.
- 35) E. Heimann, *op. cit.*, p.40. ◦印引用者。
- 36) *ibid.*, p.40.
- 37) *ibid.*, p.41.
- 38) *ibid.*, p.41.
- 39) E. James, *op. cit.*, p.61.
- 40) *ibid.*, p.61. ◦印引用者。
- 41) E. Heimann, *op. cit.*, p.41. ◦印引用者。
- 42) 武藤光朗, 前掲書, 50 ~ 52 頁。
- 43) A. Skinner, *A System of Social Science*, *op. cit.*, p.125.
- 44) E. Heimann, *op. cit.*, p.40.
- 45) E. Heimann, *op. cit.*, p.44.
- 46) 山崎怜「ヒューム研究」季刊『社会思想』1972年, 第2巻第2号, 社会思想社, 190頁。
- 47) Jevons. *On Richard Cantillon*, *op. cit.*, p.342. ◦印引用者。
- 48) *ibid.*, p.342. 傍点原著者。
- 49) *ibid.*, p.342.
- 50) *ibid.*, p.342~343. ◦印引用者。
- 51) *ibid.*, p.343.
- 52) *ibid.*, p.344.
- 53) *ibid.*, p.344.
- 54) *ibid.*, p.344~345. ◦印引用者。
- 55) *ibid.*, p.345.
- 56) *ibid.*, p.347.
- 57) 大野精三郎『歴史家ヒュームとその社会哲学』前掲書, 2頁。
- 58) 小松茂夫「訳者あとがき」(『市民の国について』岩波文庫, 323頁所収) ◦印引用者。
- 59) 大野精三郎, 前掲書, 33頁。
- 60) 田中敏弘『社会科学者としてのヒューム』前掲書, 2頁。
- 61) 同書, 30頁, 傍点原著者。
- 62) 大野, 前掲書, 67頁。
- 63) Hume, *Writings on Economics*, edited and introduced by Eugene Rotwein, Nelson; 1955. p.3. 傍点原著者。
- 64) *ibid.*, p.4.
- 65) 田中敏弘, 前掲書, 25頁。

- 66) 同書, 30 ~ 32 頁, °印引用者。
- 67) E. Heimann, op. cit., p.63.
- 68) 大野精三郎, 前掲書, 118 頁, °印引用者。
- 69) E. Heimann, op. cit., p.45.
- 70) ibid., p.45.
- 71) 田中敏弘, 前掲書, 30 頁。